

『老妓抄』 岡本かの子

平出園子というのが老妓の本名だが、これは歌舞伎俳優の戸籍名のように当人の感じになすまないとこがある。そうかといって職業上の名の「小その」とだけでは、だんだん素人の素朴な気持ちに還ろうとしている今日の彼女の気品にそぐわない。ここではただ何となく老妓として置く方がよからうと思う。

人々は真昼の百貨店でよく彼女を見かける。目立たない洋髪に結び、市楽の着物を堅気風につけ、小女一人連れて、憂鬱な顔をして店内を歩き廻る。恰幅のよい長身に両手をだらりと垂らし、投出して行くような足取りで、一つところを何度も廻り返す。そうかと思うと、紙風の糸のようにすつと行つて、思いがけないような遠い売場に佇む。彼女は真昼の寂しさ以外、何も意識していない。

こうやつて自分を真昼の寂しさに憩わしている、そのことさえも意識していない。ひよつと目星い品が視野から彼女を呼び覚すと、彼女の青みがかった横長の眼がゆつたりと開いて、対象の品物を夢のなかの牡丹のように眺める。唇が娘時代のように捲れ気味に、片隅へ寄ると其処に微笑が泛ぶ。また憂鬱に返る。

だが、彼女は職業の場所に出て、好敵手が見つかると、はじめはちよつと呆けたような表情をしたあとから、いくらでも快活に喋り出す。新喜楽のまえの女将の生きていた時分に、この女将と彼女と、もう一人新橋のひさごあたりが一つ席に落合つて、雑談でも始めると、この社会人の耳には典型的と思われる、機知と飛躍に富んだ会話が展開された。相当な年配の芸妓たちまで「話し振りを習おう」といって、客を捨てて老女たちの周囲に集まった。

彼女一人のときでも、気に入った若い同業の女のためには、経験談をよく話した。

「老妓抄」

老妓抄は一九三八年に発表された岡本かの子の短編小説。かつての芸妓が、発明家を目指す青年柚木(ゆき)を、物心両面で面倒をみるという話である。

発表当時から、大きな反響をよび、「忘れがたい感銘を受けた」(川端康成)と絶賛された。

上記の文章は、その冒頭にあたる。今はすっかり隠居した老妓が、百貨店廻りをして、暇をもて余している。

ひとたび話を始めると、多くの人が聞き入り、笑い、興味が惹かれてしまふという話芸の持ち主であることが浮かび上がる。その背景には、彼女のこれまでの人生の辛酸があった。

老妓は小財産も出来て独り立ちしたところに、家に入出入りする電氣屋の柚木を見初める。発明家になりたいという柚木の夢を実現させるため、家を与え生活の一切の面倒を見ることにする。いわば自分が芸妓だったころの立場を逆にして、「男を囲う」のである。

だからと言って、性的な関係を求めるふうには描かれない。柚木は、次第に発明家への意欲を失っていきながら、束縛されたその家から何度も飛び出す。しかし、結局は引き戻される。

実は老妓は、本当の一途な男女の思いというものに焦がれていた。

人間というものが持つ、執着と自由と束縛の関係が、老若の人物を配して、独特の筆致で描かれる。

老いた芸妓の昔語りには終わらない生きる深みを表現している。引用文ではわかりにくいですが、かの子の文章は、あたかも人の心の中に人語を解する、水棲生物を解き放ち、その生物が人間の心理を描写しているような独特な粘り気と暗い美を内蔵しており、その妖しい美に、人は深い感銘を受けるものと思われる。

(筆者)岡本かの子
(一八八九〜一九三九)破天荒で恋多き作家として有名。芸術家岡本太郎の母親。小説家としては、晩年の数年の活躍だったが、仏教研究者としての顔もある。